

聾学校におけるダンス学習指導

体育教室 佐分利 育 代
井 上 茂 子*

Dance Education at School for the Deaf

Ikuyo SABURI, Shigeko INOUE*

1. はじめに

聴覚障害は、言語だけでなく体力や運動能力の遅れをももたらしている。桜井らは一連の聴覚障害児の体力と運動能力に関する調査研究において、昭和49年、50年の奥田体育賞会の調査同様、普通児との有為な差を認めている⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾。その原因の一つとして桜井は幼児期からの生活環境、すなわち言語能力の回復に費やされる時間が多く、遊びの中で運動能力を高めていく経験が少ないこともあげられるのではないかとしている⁽⁴⁾。又、普通児との差は認めながらも、修学後の運動能力の発達が順調であることをあげ、聾学校での学習指導の課題の大きさを指摘している。

聾学校での体育の学習内容は普通教育に準ずるとされている。しかしながら、児童生徒数の制約から実際には特殊なものに偏りがちである。特にチームゲームは取り入れにくく、課外活動につながる聾学校間の試合も陸上競技と卓球という個人や二人で行うものに限られている。普通学校との競技や交流も実現が難しい。鳥取聾学校では、教師や職員の協力、卒業生との練習によってバレーボールなどのチームゲームを経験させている。準ずるとはどのようなことなのか、どこまでその内容を保障するべきか、またできるのかは、運動能力の発達、さらに生涯体育や卒業後の生活全般にまで及ぶ問題である。

鳥取聾学校の中学部と高等部では、学習内容として創作ダンスを取り上げ、それを通して学校外との交流も行ってきた。創作ダンス学習の継続によって、生徒のダンス技能は普通児におけると同様に発達し⁽⁵⁾、その中で、言語表現への広がりもあった。少人数での学習でも、3人以上であればグループとしての表現性の追求やグループ活動も体験させることができた⁽⁶⁾。このグループ感覚や仲間との関係の体験、コミュニケーション、表現欲求の満足等、セラピーとしての貢献も期待できる⁽⁷⁾。

本研究ではこの創作ダンス学習指導について、全国の聾学校での実施状況を探ると共に、聾学校での学習内容としての創作ダンスの課題を明らかにしたい。

2. 研究方法

全国の聾学校中学部及び高等部の体育指導者を対象に行った調査結果を用いて、聾学校における創作ダンスに関する上記の課題などについて考察する。

調査の概要は次の通りである。

調査対象	全国聾学校中学部及び高等部の女子生徒担当の体育指導者各一名 中等部・94校 高等部・74校
調査方法	選択肢と自由記述による質問紙（記名）を郵送により送付，回収
調査期間	1990年6月から7月
回収率	中等部・58.5%（55校） 高等部・63.5%（47校） 全体・60.7%（102学部）
調査項目	①ダンス学習指導の実施状況 ②教材としてのダンス観 ③創作ダンス学習指導の実施状況 ④創作ダンス学習指導実施の方法
集計	選択肢による回答はSPSS-Xを用いて集計

回答は全体の63.7%（65人）が女性，35.3%（35人）が男性からのものであった（不明2.0%）。年齢の内訳は，30代が最も多く32.4%（33人），続いて20代25.5%（26人），40代21.6%（22人），50代19.6%（20人），60代1%（1人）であった。聾学校での勤務年数は3年が最も多く，17.6%（18人），続いて1年と2年で11.8%（12人）で，3年未満が48.0%を占めた。次に4～7年が多く（27.4%），比較的聾学校経験の浅い指導者が多かった。最も長い勤務年数は30年で2人であった。

表1. 授業形態

授 業 形 態	中学部%	高等部%	全体 %
学 年 別 男 女 別	3.6	8.5	5.9
学 年 別 男 女 合 同	3.6	10.6	6.9
3 学 年 合 同 男 女 別	14.5	27.7	20.6
3 学 年 合 同 男 女 合 同	50.9	25.5	39.2
そ の 他	27.3	27.7	27.5

授業形態は表1のようで，各学年別で男女別のクラスによる体育の授業を行っているのは，中学部で2校（3.6%），高等部で5校（10.6%）だった。

その他としている学校では，授業によって，男女合同であったり別であったり，その形態が一定していないという回答であった。

3. ダンス学習指導の実態

①ダンス学習指導の実施状況

(1)ダンス学習指導の実施状況

全国の聾学校でのダンス学習指導の実施状況については図1の結果を得た。何らかのダンス学習を行っている聾学校は，中学部と高等部合わせて49.0%（50人）であった。回答者の性別では，女

性42人(64.6%)、男性では8人(22.9%)しか指導していなかった。
実施した学習の時間数では6～10時間が最も多かった。(図2)

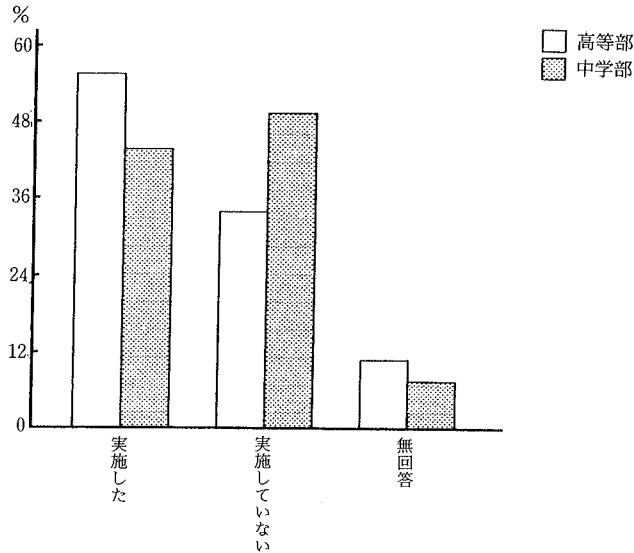


図1 ダンス学習指導の実施状況

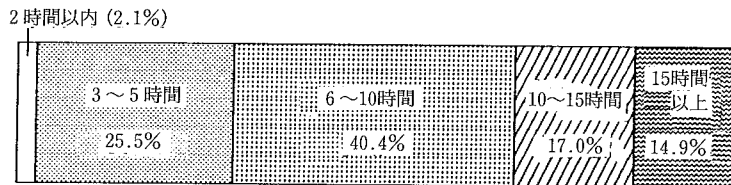


図2 ダンスにかけた時間

(2)ダンスの実施内容

実施しているダンスの種類を複数回答で求めた。創作ダンスとフォークダンスはほぼ同じ割合で(なんらかのダンス指導を実施していると答えた指導者の内、56.0%と58.0%)実施されていた。

図3は学部別のダンスの種類で、高等部で「エアロビック・ダンス」も多く行われていた。指導者の性別では、女性は「創作ダンス」と「フォークダンス」を取り入れており、男性は標本が少なく断言できないが、「フォークダンス」や「エアロビック・ダンス」のようなステップの決まったものに取り組む傾向にある。

「創作ダンス」「フォークダンス」「民謡」「既成作品」の内容は、表2のようなものである。「エアロビック・ダンス」や「ジャズダンス」では使用した曲名があげられていた。「エアロビック・ダンス」では『ストレッチング、ランニング中心に』等、身体づくりとして、「ジャズダンス」でも『創作ダンスや他の種目の準備運動として』行っているものがあった。「エアロビック」「ジャズ」と名称が異なるほど内容を区別して使っているかどうかは余り明確ではなかった。

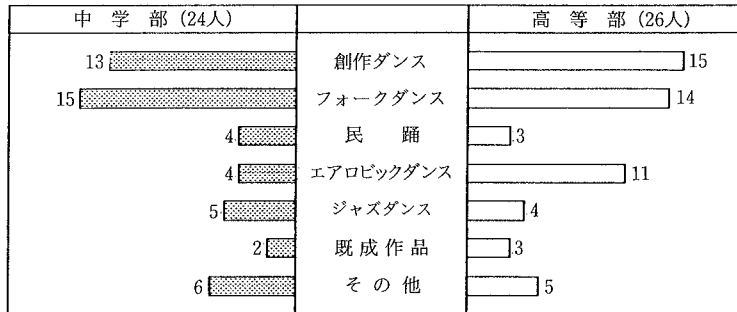


図3 学習にとり入れたダンスの種類 (単位:人)

表2. ダンスの内容

ダンスの種類		内 容 (作 品 名)
創作ダンス	中学部	お祭り 夢 夢の中へ 花と妖精 宝島 青い島 ロボット スポーツ 夏が好き
	高等部	グロリア 月と海 四季 枯葉の舞 鳥の一生 カラスの愛 青い鳥 喜び 願い ああ青春 涙を見せない 大都会 I want free 学校生活 ソーラン節に合わせて
フォークダンス		オクラホマミクサー13校 マイムマイム11 コロブチカ8 ジェンカ5 タタロチカ4 パティケーキ・ポルカ4 アメリカン・プロムナード3 ジェーシー・ポルカ2 オースザンナ2 線路は続くよどこまでも2 他
民 踊		ソーラン節2校 河内音頭 炭坑節 ドンパン節 越中おはら節 こきりこ節 室蘭ばやし
既 成 作 品		荒城の月 花畑の朝 浜千鳥 戸倉ハル全集の中から 聾学校音頭2校

(3)リズムやタイミングの合わせ方

聴覚障害児は、音楽が聞き取れないためにリズムがとりにくく、友だちとも合わせにくいと知られていることが多い。実際の指導ではどの様に行われているかを選択肢で尋ねた。創作ダンスを実施している指導者から、「踊っている生徒自身の呼吸や気持ち」で合わせているとの回答を多く期待したが、「身体に感じる音(タイコ、楽器など)」や「視覚(指導者または指揮者の合図、友だちの動き)」の選択がどちらも約80%あった。どの内容のダンスの指導にも同じ結果を得た。

②教材としてのダンス観

(1)教材としてのダンス観

教材としてのダンスについて、「良さ」はどんな所にあると思うか質問した。その結果を指導していると答えた人と指導していない人に分けて示したのが図4である。回答は選択肢より最も重要と思われるもの3つの選択とした。

ダンスの良さの選択の結果より、ダンスは、「リズム」「感情」「表現・伝達」の特性を持ち、実施によって「いろいろな運動体験」が得られる教材ととらえられていることがわかる。

3つの選択を要求したにもかかわらず、実施していない指導者では、平均1.6項目の選択しかして

おらず、実施した指導者が2,8項目選んでいるのと大きな隔たりがあった。実施してその良さを発見し、発見した良さを深めるべく、さらに次の実施へと向かうものと思われる。

ダンス指導を実施した指導者としていない指導者の差が特に大きく現われたのは、「生徒の普段ではみられない面が発見できる」と、「楽しく体力づくりをさせられる」の項目であった。実施によって実感できる良さ（ダンス観）と思われる。

「題材への興味を生徒に持たせられる」は、実施した指導者にもしない指導者にも全く選択されていないかった。生徒が興味を持ちにくい教材としてのダンス観が指導者にはあるようである。学習内容としてのダンスを取り上げている指導者が約半数でしかないこととの関連が予想できる。

指導した (50人)		指導していない(43人)
18	感情を豊かにする	10
18	表現・伝達の喜びを体験させられる	10
7	自己開放させる	5
	題材への興味を持たせられる	
30	リズム感を養う	17
12	楽しく体力づくりをさせられる	2
19	いろいろな動きを体験させられる	
5	身体意識をもたせられる	2
17	生徒の普段では見られない面が発見できる	4
5	生徒数が少なくてもグループ活動ができる	2
3	日本や外国の文化や伝統が伝えられる	2

図4 ダンス教材の良さ (単位：人)

男性 (23人)		女性 (20人)
	音が聞こえないのでリズムやタイミングを合わせるのが難しい	2
1	音が聞こえないのでイメージを持たせにくい	3
	生徒に興味がない	4
14	指導者に経験がない	5
1	他の教材で間に合う	
8	他の教材で手いっぱいだから	7
	他の学年が実施していない	
6	その他	7

図5 ダンス学習を実施しない理由 (単位：人)

(2)ダンスをしない理由

ダンス指導を実施していない理由として、男性の14人（60.9%）が「指導者自身の経験の無さ」を、続いて「他の教材で手いっぱいだから」を選択している。女性でも「他の教材で手いっぱいだから」の選択が最も多かった（図5）、時間を作っても取り入れたいと思うほど、教材としてのダンスの特性は評価されていないといえる。また女性の指導者でも、「自身の経験の無さ」が「その他」に次ぎ3番目に選択されていたが、指導者の経験不足と教材としてのダンスへの不理解は、創作ダンスが学習に取り入れられて40年以上経て未解決の課題として重要である。

その他の理由では、「男女一緒にできれば」があり、聾学校での男女合同の授業形態がダンス実施上の一つの障害となっていることがうかがえる。男女共修のダンス学習は、普通教育での課題でもある。指導計画の再検討で男女別クラスの可能性を探ると同時に、男女共修でのダンス指導法研究も特に必要である。

「生徒に興味がない」を選択した女性指導者が4人あった。教材としての良さに関して、「題材への興味を生徒に持たせられる」が全く選択されなかったことと合わせ、生徒のダンス観に対する指導者のこの評価もまた、ダンスを学習内容とすることを妨げる一要因と思われる。

③創作ダンス学習指導の実施状況

創作ダンス学習指導は、今回の調査では中学部で23.6%、高等部で31.9%の学校で行われていた。ダンスを取り上げている学校だけで見ると、中学部で54.2%、高等部で57.8%の割合であった。

創作ダンスの学習にかけた時間は4～5時間が最も多く（図6）、放課後も指導したことがあるとした指導者が42.8%あった。学習のまとめとしての発表会はどの学校も行っており、授業の中だけでなく、校内の学習発表会や運動会で80%が学習の成果を発表していた。

創作ダンスは、聾学校だけでなく、普通学校との交流の機会も得られる学習内容である。校外での発表会への参加は、3校ではあるが行っていた。

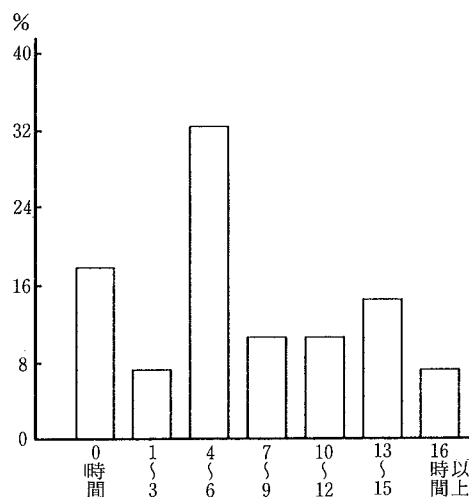


図6 創作ダンス実施時間数

④創作ダンス学習指導実施と課題

(1)創作ダンス学習指導のために解決すべき課題

創作ダンス学習指導を実施していない指導者で、今後指導してみたいと答えたのは41.9%で半数に満たなかった。

指導してみたい理由、今後も指導したいとは思わない理由をそれぞれ自由記述で求め、得た内容を表3のように分類した。創作ダンスを今後指導してみたい理由としての52の内容が、したくない理由として24の内容があった。

表3 今後指導したい理由としたくない理由

今後創作ダンスを指導してみたい理由	人	創作ダンスは指導したくない問題点	人
・自己表現力を育てられる	21	・ダンス指導に自信がない	5
・感情を豊かにし、美しさに感じる心を育てられる	13	・指導が困難な教材である	5
・生徒が好きだから	6	・生徒数が少ない	5
・リズム感を養える	4	・生徒が興味を持ちにくい教材である	2
・創る活動の苦しみ楽しさを味わわせられる	2	・時間がとれない	2
・生徒の普段見られない面が発見できる	2	・他のもので間に合う 表現力……………言語力	2
・グループ作りができる、体力づくりができる 等その他	4	運動量……………他の種目 メジャー スポーツをやらせたい	
		・指導しなくても特に問題はない	1

指導してみたい理由のほとんどがダンスの表現性に関するものであり、自己表現力、豊かな感情の面でダンスが聴覚障害児の教材として最も魅力あることととらえられていることがわかる。言語表現や音楽との関係について、どうとらえているかにまで及ぶ記述はなかった。

指導したくない理由としては、「指導に自信が無い」「指導が困難」の記述が多く、指導法や指導内容に具体性を見いだせずにいる指導者の存在が想像できる結果であった。

指導してみたいとする理由にも、「豊かな感情を養う」「表現、伝達の喜びを体験させられる」「自己の表現方法を知らせる」「聴覚障害のある子どもにとって、イメージを豊かにする訓練に役立つ」等、身体運動による表現活動に期待する反面、「現実には難しい」「生徒の心が離れすぎてどうしようもない」「現実には可能かどうか」の記述があり、指導にはかなりの不安があることがわかった。

誰にもできる具体的でとりかかりやすい指導法、生徒にも「面白そうだな」、「やれそうだ」、「やっぱり面白い」と思わせる内容がこれまでに示されていないわけではない。しかし、未だに充分には浸透していないといえる。

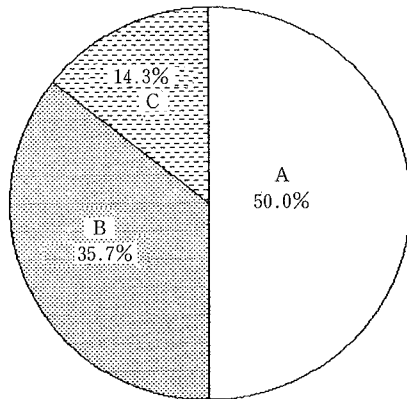
ダンス全体に対する質問の回答でも「指導者の気持ちがダンス指導実施に向いていない」ことが現れていたが、創作ダンスへの指導者の非積極性は、指導に対する不安がその一原因となっていることが明らかである。

この創作ダンス指導に対する非積極性は実際に指導を実施した指導者にもみられた。

創作ダンス学習指導を実施した指導者に生徒の興味関心を尋ねた項で、「ほとんどの生徒が楽しく学習に参加し、次への意欲をわかしている」と評価したのは半数でしかなかったこと(図7)、また、学習後の生徒の変化について尋ねた項でも、「やり始めたら意欲を持って取り組んだ」「やり終えた満足感に残るようだ」等、学習への導入や指導を進めることの難しさの続み取れる記述があったことなどである。また、「指導者に不満が残る」等、指導者自身にも達成感が得られなかったとの回答

も多くあった(表4)。

これらの回答は、現在創作ダンスを指導していると答えた指導者も将来指導しなくなる可能性もあることを示しているように思われる。



- A. ほとんどの生徒が楽しく学習に参加し次への意欲をわかしている
- B. 半分位の生徒が楽しく学習に参加し次への意欲をわかしている
- C. 嫌いな生徒が多く楽しんで学習できない

図7 指導者が評価した生徒の興味関心

表4. 創作ダンス学習後生徒に現れた変化

・やり始めたら意欲を持って取り組んだ	5人
・やり遂げた満足感が残るようだ	4
・指導者に不満が残る	3
・他の種目の苦手な生徒がダンスで自信を持った	3
・身体表現への興味を持った	2
・運動会への興味を持った	2
・他の種目、生活面の動きが良くなった	2

しかし、「取り組むことへの意欲」「やり遂げた満足感」を生徒が味わっていること、「運動会への興味を持った」のように学習を通して学校行事への参加に興味を持ったこと、そして「ダンスで自信を持った」「他の面での動きが良くなった」等、ダンスで生かされた生徒がいたとの指導者の評価は見逃せない。一人一人の障害の度合が異なるというだけで個性的

な生徒が、一人でも意欲を持って個を生かせる機会を指導者が評価するなら、その場は確保される必要がある。

創作ダンス学習の指導が、指導者に不安や未達成感を感じさせ、指導に対して積極的になれなくしている原因は何か。指導法が行きわたらない理由は何か。これらについて、先の表3においてあげられた、創作ダンスを指導してみたい理由としての「良さ」の記述内容の抽象性が指摘できる。すなわち、指導法具体化より以前の問題、教材としての創作ダンスの特性自体が未だに具体的に理解されていないところに創作ダンス学習指導の実施を妨げている原因があると思われる。

他の教材では得られない創作ダンスだけの体験の一つ一つがはっきりと理解されていれば、指導法が現実のものとして指導者に受け入れられるに違いない。どんな表現性や運動が体験できるのか、多くの実践例から共通するものを拾い出し、教材としての創作ダンス観を指導者に持たせることが指導理論を具体性のあるものとして意味づける。新指導要領における選択制導入に対処するためにもこのことは必須である。

そしてさらに、聴覚障害を持つ生徒のための教材としての創作ダンス観の明確化が必要である。

本当に言語表現の指導で間に合うのか、他の運動教材で間に合うのか、少人数だからできないのか、男女同一クラスではできないのか、3学年同一クラスではできないのかなどの解決すべき問題点もすべてここにその糸口があると考える。

男女共修で、それぞれの良さが発揮できたとする実践例や⁽⁸⁾、創作ダンス学習を通して得られる創造性の報告もなされている⁽⁹⁾。他の運動種目では体験できない創作ダンス学習独自の体験のデータを整え、創作ダンス観を明確に持たせることで、学習指導への教師の非積極性を積極性に転換させることが創作ダンスの学習指導実践率を高めるために急務であり、今後の課題である。

(2)聾学校における創作ダンス学習指導の課題

創作ダンス学習指導実施者が実際に用いている指導の方法を通して聾学校における創作ダンス学習指導の課題を探った。

・イメージの持たせ方に関する課題

身体運動表現学習のためのイメージの持たせ方を自由記述で求めた。各手がかりの内、aは、イメージをもたせる手段として、bは、イメージを様々な表現手段で一度表現させる方法として以下のように分類した。

言語表現を手がかりに	a. 詩から連想して…………… 3人
	b. テーマや言葉のイメージをできるだけ多くの言葉にして… 9人
視覚を通して	a. ビデオや写真を通して表現の対象を体験させる…………… 7人
	b. 絵を描かせて 色のイメージを出させて…………… 2人
音、曲を使って	a. 曲を何度も聞かせて…………… 3人
	b. テーマから曲を選んで…………… 1人
動きから	a. 運動の持つ感情表出性の体験を手がかりにして…………… 3人
	b. 運動体験の追体験を手がかりにして…………… 2人
ダンスを観て	・教師の師範で…………… 4人
	・参考作品をビデオで観て…………… 3人

「動きから」のa. b. はダンスの二側面からのイメージの持たせ方で、5人(16%)あった。他の手がかりでa. として分類したものは原体験の範疇でとらえられる。b. はいろいろな表現方法があることや他の表現とダンス表現の違いを知らせるため、また、いろいろな角度からとらえさせるために興味ある指導法といえる。しかし、他の表現手段で表現したイメージを運動表現に置き換えると考えるならば、それはダンスに対して遠まわりの方法である。

今回の調査では言語表現を聾学校でのダンス学習指導の手がかりとして考えている指導者が最も多かった。イメージをもたせるために言葉を見つけさせる方法は、普通児の創作ダンス学習でよく用いられる。しかし、言語表現にハンディを持つ聴覚障害児にとって、言葉がその内的体験を代弁し、ダンスで眼前化するための橋渡しの役を荷なえるのかどうかは疑問である。ダンスの表現が表現欲求を満たし、言葉では語り尽くせないことを表現し、言葉では感じ取れなかった部分を感じ取らせ、普通児にとってそうである以上に、生徒の周りにあるものを増やしたいとのねらいで指導されるなら、ここでの言葉の介入は不必要である。

とは言うものの、聾学校での学習に於て、言語の問題は大きい。言語教育と結び付けざるをえな

いのであればダンスでの表現は、言語表現への広がりという形での橋渡し役を、その目的の一つとして指導しなければならないであろう。

・動きの引き出し方

ダンスとしての動きを生徒自身のものとして行わせるために、指導者がとっている方法を自由記述で尋ねた。回答は、動きの引き出し方に関するものと、その発展のさせ方に関するものに分けることができた(表5)。

動きの引き出し方のうち、生徒に体験させたい『ダンスの動き』に対する指導者の考え方が比較的よく現れていた記述を、Aとしてくくった。これらの指導者は、日常の動きをダンスの動きに変えていく方法、表現者が何を最も表したいのか明確にすること。自分なりの感じ方を大切にすること等ダンスの運動観を、それぞれの言い方で生徒に伝えていた。18の回答の内、3分の1の6人がここに入るものであった。このうち、ダンスの動きへのアプローチの仕方を直接的な表し方で記述した回答は、「架空の大きな動き」「極限の動き」「動きの特徴がはっきりしているもの」の3つだけであった。これらは、松本らによる課題学習の運動観と通ずる⁽¹⁰⁾。

Bは、リズムや呼間という、ダンスの運動の時間や力の性質からの指導で、2人があげていたが、動きの内容についての記述はなかった。聴覚障害のある生徒が、自己の内的リズムを発見し表現することを援助できるなら、一つの有効な手がかりであろう。

Cは観賞を通してダンスの動きに対する予備知識を与え、それをヒントに動きを見つけさせたり、意欲づけたりしているものであるが、指導者の運動観が推測できない。5人がここに入った。

Dは動きに対する指導者の考えが具体的に現れていない記述として1グループにした。手がかりの無い自由は活発な学習活動を生み出さないと思えるが、このような記述が5人であった。

以上、運動観が明確に示されないまま生徒に渡されてしまう学習が多いように思われた。

表5. 動きの引き出し方

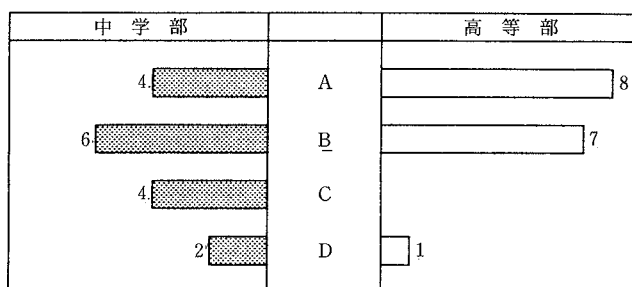
動きの引き出し方	動きの発展のさせ方
A. 架空の大きな動き 極限の動き 動きの特徴がはっきりしているもの 人と変わった動き(運動の課題より) 観客がみてハッとしたり、面白いなど思う ようなモチーフ リズムの刻みにとらわれすぎない	リーダーが自分の動きを他の人に模倣させ、 それに新しい動きを加えていく 二人一組でAの動きをBが模倣したりして発展
B. リズムを与えて動いてみる 呼間で動く	4呼間を単位に 1段階 4呼間×4…A 基本のパターンを A'になるよう指導
C. 指導者がイメージにあった動きを出す 師範するときがある 観賞したステージの動きや、ビデオでの先輩の動きにヒント 写真や本を参考に	2段階 4呼間×8…A 空間の使い方もい れて32呼間を基本にする

<p>D. 想像した通りに動く 生徒自身がまず動く 生徒が創った動きを発表 子供たちに考えさせた リーダーを決め、各個人に責任を持たせた</p>	<p>ビデオ等で個々の動きを視聴させた ビデオで生徒の動きを撮り、自分の動きを観て何を考えるか 生徒がまず動き、バリエーションを増やす</p>
--	--

動きの発展のさせ方についての記述として分けたものは小数ではあったが、動きの引き出し方と似た立場での内容があった。このうち、4呼間を単位に動きを見つけさせ、それを発展させている方法は、形式を手がかりにするもので、邦⁽¹¹⁾、江口⁽¹²⁾らラバン理論の流れを汲む指導者によって広く教育現場に浸透し、客観的なよりどころとされてきたものである。しかし、聴覚障害のある生徒への指導法としては、規制の方が多すぎる手がかりではないかと思われる。

・作品づくり

作品としてまとめる活動については図8のようであった。高等部ほど生徒中心に行われていた。



- A: 生徒たちがグループで相談してテーマやイメージづくりから動きづくりまで全部考え作品としてまとめた
 B: 半分くらい教師がかかわって作品としてまとめた
 C: ほとんど教師がかかわって作品としてまとめた
 D: 作品としてはまとめることができなかったがイメージを身体の動きで表現した

図8 作品のイメージづくり(単位:人)

中学部で指導者が作品をまとめるのに関与する割合が高かった。中学部では、学習段階として作品をまとめる段階にまで達していないと思われるが、その段階なりのまとめ方の工夫も、達成感を高めるためには必要である。

高等部になればダンス経験が少なくても、表現したいことを作品としてまとめる力があるとも考えられるが、この結果を学習の発展の様子ととらえることもできる。学習が継続されることの重要性への示唆と考えたい。

・伴奏音楽、リズムやタイミングの合わせ方

ダンス指導全体でも尋ねたが、聴覚障害児のダンス指導に於てハンディと考えられることの多い伴奏、友だちと併せて踊ることについて、創作ダンスの指導での実状を自由記述で尋ねた。

回答は大別して3つの考え方に分けられた(表6)。

表6. 伴奏音楽, リズムやタイミングの合わせ方

合わせ方	実践した方法
生徒の動きに合わせる 6人	お互いの呼吸で合わせる 現在はリズムを合わせることを第一としない 伴奏音楽は無して今回は行った 生徒の動きに合う曲を選んだ 生徒の創ったリズムに太鼓を合わせる 床をならしステップさせる
音楽に合わせる 9人	聞こえる生徒中心に反復練習(2人) よく聞き、聞き取るまで繰り返す 時間をかけて曲を感じ取らせてから動きにはいる 呼間を数え声を出させながら動く(2人) 変速的なリズムでなく一定のリズムが打てる曲を選び、呼間数を覚えさせ何度も練習させた 動きのフレーズ(16~32呼間)を覚えたところで太鼓の合図をはずす フロアーに置いたスピーカーの振動で伝える
指導者の指示に合わせる 5人	タイコ、手、で指揮した 手を打ったり、指示棒を振ったりで指示を出す 指導者の合図(2人) 指導者が師範を示し模倣させる

生徒の自己表現としての創作ダンスの学習にもかかわらず音楽や指導者の合図に合わせて踊っている生徒が多かった。「現在はリズムを合わせることを第一とはしていない」と回答を寄せた指導者も、「以前はより聞こえる生徒にたよってリズムを合わせたり光刺激装置で完璧に合わせてようにした」とその考え方の変化を記述しているが、生徒の表現を主体として、伴奏をとらえる指導者がまだまだ少ないことがわかる。

創作ダンスに於ける伴奏音楽は、表現を助けるものとして使われるものである。M.ドゥブラーが、「リズム構造を通して、音楽は運動反応のリズミック形式を導き、ムードや観念に対して舞台装置を与えることができよう。」と、述べるように⁽¹³⁾、聴覚に障害の無い子どものダンス創作過程に於て、音楽はイメージをふくらませ、作品を組み立てるのを助ける。しかし聾学校では、イメージを豊かにすることより、音楽のリズムに合わせて何倍も精力を使われている生徒が多いのが実状のようである。表現は伴奏音楽との相乗効果でより強められるものではあるが⁽¹⁴⁾、聴覚に障害のある生徒のダンス作品の場合、それは聴覚に障害の無い観る側にとっての問題になる。聴覚に障害のある生徒にとって、音楽にあっているかを気にしながら踊ることがどれほどの意味を持つのか疑問である。

しかし、イメージの引き出し方におけると同様、これも純粋にダンスでの表現を楽しませたいとの立場からの考察である。創作ダンスの学習をリズム教育としてとらえるなら、また、聴く能力のある限り音楽も聞かせその感じを味わわせたいとの視点で指導されるのであれば、「音楽に合わせて」指導全てを拒むことはできない。そしてそのような立場に立つとしても、既成のリズム、特に単純な拍節的なリズムを体験させるのみにとどまらず、生徒自身の内的なリズムの現れとしての運動のリズムをも体験させたい。ここに創作ダンスを学習内容とするひとつの意味がある。

・グループ活動のさせ方

グループ活動に関して、グループの人数、構成、創作活動の進め方等、20人から回答があった。グループの人数では、「6・7人」「3人以上5人以内で」「2・3・4と増やしていった」など、

学習内容や、生徒の希望によって流動的に考えられている事がわかった。一方「グループ活動にまで至っていません」との回答も1つであるがあった。

グループの構成は、「学年が混ざって」「学年毎に」「好きなもの同志で」等これも流動的で、少人数、学年混合でのグルーピングに対する問題点をあげた指導者はなかった。

しかし活動の進め方に関して、「リーダーが中心で協力して(2人)」「一人一人が動きを考え、それをつなぐよう指示した」等の他、「リーダーが教師のサブ的役割」「聞こえる生徒を主にやらせてしまい」「能力の高い生徒が主になってしまっている」「なかなか意見がまとまらず、何時間も話合いのみに終わり身体活動が少なく残念」の問題点が寄せられた。先の、「グループ活動にまで至っていません」の回答を含め、理想とする活動が得られない実態報告である。

問題点の中には特にリーダーのあり方に対する混乱があるように思われる。グループ表現を追求するためのリーダーか、指導者との通訳なのか、伴奏を聞いて伝える役なのかの混乱である。生徒同志の活動に指導者がどの様にかかわるかと同時に、そのコミュニケーションの問題がある。これは聾学校特有の問題ともいえる。

以上、実践されている指導法には、聾学校特有のあるいは、普通学校にも共通の問題点があった。

4. おわりに

全国の聾学校中学部、高等部の体育指導者を対象とするダンス及び創作ダンス学習指導の実態に関する調査より得られた結果をまとめると次のようである。

1. ダンスは、49.0%の聾学校で学習指導され、創作ダンスの実施率は中学部で23.6%、高等部で31.9%であった。
2. ダンス学習指導実施の有無にかかわらず指導者は、「リズム」「感情」「表現・伝達」「いろいろな運動体験」の特性を持つとのダンス観を持っている。実施した指導者は「生徒の普段ではみられない面が発見できる」「楽しく体力づくりをさせられる」教材ともとらえている。
3. 創作ダンス学習指導が実施されない理由は、指導法具体化の問題以前に、「生徒が興味を持ちにくい教材とのダンス観」、「指導者の経験不足」と「ダンス教材の特性への不理解」のように、『創作ダンスの特性自体がいまだに指導者に具体的に把握されていないこと』があげられる。
創作ダンス学習指導実施のためには、「創作ダンスの教材としての特性を具体的なデータを通して指導者に理解させ、明確な創作ダンス観を持たせることで、学習指導への指導者の非積極性を積極性に転換すること」が課題である。
4. 創作ダンスを実際に指導している方法から、聾学校での創作ダンス学習指導の課題として次のことがあげられた。

《イメージの持たせ方》

運動の持つ表現性や、運動体験を通してのイメージを学習の手がかりとしている指導者は少なく、言語表現をダンスの手がかりとして考えている指導者が最も多かった。

言語表現とどうかわらせていくかの、聾学校としての課題がある。

《動きの引き出し方》

学習者自身の体験の結果としてのダンスの動きへのアプローチの方法を、直接的な言葉でア

ドバイスしている指導者は少なく、指導者の多くは、創作ダンスの動きに対する明確な運動観を持たないで指導しようとしているようであった。

《作品づくり》

高等部ほど生徒中心に作品づくりが行われ、中学部では指導者が作品をまとめることに多く関与していた。学習段階なりの、表現のまとめ方の工夫が必要である。

《伴奏音楽、リズムやタイミングの合わせ方》

生徒の表現を主体として、伴奏をとらえている指導者がまだまだ少ない。イメージの表現より、音楽のリズムに合わせることに何倍も勢力を使わされている生徒が多い。

リズム教育との関わりに於て聾学校特有の課題がある。

《グループ活動のさせ方》

少人数、学年混合に対する問題をあげた指導者はなかったが、特にリーダーのあり方、グループ表現を追求するためのリーダーか、指導者との通訳なのか、伴奏を聞いて伝える役なのか、混乱がある。生徒同志の活動に、指導者がどの様にかかわるかと同時に、そのコミュニケーションの問題があり。ここに聾学校特有の課題がある。

小学校教師を対象とした1978年の調査結果を例に西谷らは、子どもたちの「ダンス嫌い」の原因として、教師の指導上の問題、教師のダンスに対する臆病な姿勢をあげている。そして、指導目標の明確化と、目標にしたがった指導体系の確立がその解決法とし、他の表現教材との比較によって目標の検討、学習内容へと考察を進めている⁽¹⁵⁾。また茅野らも、栃木県での中学校のダンス指導の実態調査を通して「誰にでもできる指導法の充実が早急に望まれている」と報告している⁽¹⁶⁾。

1982年に行った鳥取県内の小学校教師に対する調査でも、ダンス指導の問題は指導者自身の問題解決にあると考えている教師が多かった⁽¹⁷⁾。しかしその内容としてあげられた、「教師のダンス指導に対する意識の変革」、「実技研修への参加」、「意欲の向上」はむしろ、指導体系の確立や指導法の充実よりも西谷らの「他教科では補うことのできないダンスの特殊性を高く評価するならば」⁽¹⁸⁾の前提が受け入れられているかどうかの地点に留まるものである。このことは今回の調査結果、ダンス学習指導の課題は、「ダンスの特性を具体的に把握していない指導者の存在」との視点と共通するといえる。それが解決されない限り、どれだけ指導法が示されてもダンスの経験は子どもに届かない。聾学校でも障害を持たない子どもの学校においてもまず第一に指導者のこの問題から着手し直さなければならないのが現状といえる。

最後に、本研究での調査にご協力下さった全国の聾学校中等部、高等部の体育科担当の先生方に深く感謝致します。

注および引用文献

- (1) 桜井 博：聴覚障害児の運動能力についての一考察—本校の12, 13, 14才児の8年間の推移から—, 筑波大学附属養護学校紀要, 第6巻, 1984年
- (2) 桜井 博：聴覚障害児の体力についての一考察—本校の12, 13, 14才児の8年間の推移から—筑波大学附属養護学校紀要, 第7巻, 1985年
- (3) 桜井 博：聴覚障害児の体力・運動能力の最近10年間の変化, 筑波大学附属養護学校紀要, 第8巻, 1986年

- (4) 桜井 博：聴覚障害児体育② 聴覚障害幼児の「運動あそび」と運動能力，障害者体育，Vol.3, No.1, 1982年
- (5) 佐分利育代：ダンスの即興表現の発達について―聴覚障害児を対象として―，山陰体育学研究，第2号，1986年
- (6) 佐分利育代：グループによる即興表現について―聴覚障害児のダンス学習を対象として―山陰体育学研究，第3号，1987年
- (7) Fran J. Levy：Dance Movement Therapy A Healing Art, AAHPERD, 1988年
- (8) 中村なおみ，宮本乙女：単元計画作成の視点，女子体育，第32巻，第4号，1990年
- (9) 柴真理子：ダンス学習と創造性の陶冶の関係について，日本体育学会第41回大会研究発表1990年10月12日
- (10) 松本千代栄編：こどもと教師とでひらく 表現の世界，大修館書店，1985年
創作ダンス学習指導法の具体化と普及のための女子体育連盟の研究グループによる課題学習を紹介している。
- (11) 邦 正美：舞踊の美学，富山房，1973年
舞踊創作の基本法則として4単位方式，6単位方式， Rond方式，カノン方式をあげている。p.144～149
- (12) 江口隆哉：舞踊創作法，カワイ楽譜，1961年
時間構成として様々な作品構成の例をあげているが，抽象舞踊の形式は音楽に参考を求めることができるとし，一部形式，二部形式などを紹介している。p.222～223
- (13) M. ドゥブラー：舞踊学原論，大修館書店，1974年，p.160
- (14) 松本千代栄編：こどもと教師とでひらく 表現の世界，p.222
- (15) 西谷怜子他：表現・ダンス 学習指導の体系化を目指して―幼稚園から高校までの学習内容を考える―，遊戯社，1986年
- (16) 茅野理子，森島明子：栃木県下中学校におけるダンス指導の実態について，第10回全国創作舞踊研究発表会研究紀要，日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門，1990年
- (17) 岡田さつき：鳥取県小学校における表現運動学習指導の実態について，鳥取大学教育学部卒業論文，1983年
- (18) 西谷怜子他：表現・ダンス 学習指導の体系化を目指して―幼稚園から高校までの学習内容を考える―，p.28

(1991年4月20日受理)

